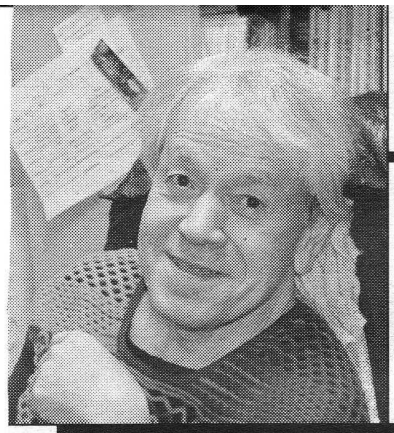

012 **志茂田景樹さん**73 作家、「よい子に読み聞かせ隊」隊長

好評連載

生きるって死ぬって…いま伝えたいこと

命を終えた瞬間に志がこの世に残るなんて何だか楽しいじゃないですか。

僕は104歳くらいで誰にも迷惑をかけずにころりと死にたいですね。95歳までは仕事をして、最後の10年は自由気ままな放浪の旅をしたい。目的地も、泊まるところも決めずに、ひとりでね。

最後の瞬間は快晴の日。冬なら小春日和がいい。食後2時間の空腹感がないときに青い空と白い雲を見ながらすーっと逝きたい。人間最後は、〝大自然と同化したい〟という気持ちになると思うんだよ。

誰にも看取られなくていいですよ。肉親には迷惑かけたくないですからね。かわりにセキレイのさえずりが河原のせせらぎの音と一緒に聞こえたらいいな。

僕は、散骨が一番自然だと思っています。お墓には入りたくない。できれば海がうれしいですね。やっぱり暖かい南の海、タヒチ島の近海かな。想像する限り、それが一番気持ちいい。

死後は、この世に自分の志が残ると考えています。それを引き継いでくれる人がひとりなのか100人なのかはわからないけど、人は死んでも志はずっと生き続ける。だから、お墓みたいに変な形にして残さなくていいと思っているんです。

僕が初めて死を意識したのは小学4年生のときでした。仲のいい小学1年生の女の子が目の前で事故死したんです。

当時、父が国鉄の職員をしていたので官舎に住んでいました。近くには砂場やブランコがある敷地があった。そこが一時的に資材置き場になっていたとき、砂利を運んできたトラックと、その子は衝突した。さっきまで一緒にキャーキャー騒いで、遊んでいたのに……。その事故後、あまりの衝撃に僕も熱を出して体調を崩した。

翌年、今度は官舎の働き盛りの人が胃がんで亡くなった。自宅療養をしていて容体が急変。掛け布団を敷いたリヤカーの上に、背中を丸めて褞袍を着た病人があぐらをかき、はぁはぁと苦しそうにしている。若い職員が自転車でそれを引っ張って病院に行くところを遠目に見ていました。死というのは怖くて痛ましいイベントだという感じがしましたね。官舎に戻ってきたときはもう遺体でした。

この2つの死は、どちらも不可思議で不気味な世界の隙間を覗いた感じで、怖いというより、もっと深い恐怖でした。僕の理想の死に方は過去に見てきたこれらの死の風景からは無縁な感じなんですよ。

僕は今、新13歳

故人と話をすることは、基本的にばかばかしいと思っています。一方的に思い浮かべるのはいいですけど。僕は今でも亡き父の〝笑顔〟を思い出すとき元気が出るんですよ。

仕事をリタイアし、悠々自適な年金生活を送っていた父は80歳のときに体調を崩し、検査入院しました。主治医に「お父さんは直腸がんで、肺と肝臓にも転移しています。余命は3か月です」と言われ、父のことを長編小説で書こうと思った。3か月で間に合うかどうかわからないけど、できるところまで……と思って書き始めました。

ばか正直だから、仕事はよくするけど出世しない。でもどこか人情味がある……そんな父の性格を登場人物に重ねました。できあがった本を最初に渡したのはもちろん父。その著書が直木賞に選ばれた『黄色い牙』です。

授賞式後は朝まで飲み歩き、家に帰ってすぐに2階の仕事部屋で横になった。すると何だか顔のまわりがかゆい……。**目をあければ、そこには朝刊の角で突く父が立っていました。骸骨が寝巻きを着ているような、鬼気迫る風貌でしたが「お前のことが新聞に出ているぞ」と、すごくうれしそうな声で笑ったんですよね。**

寝たきりだった父がなぜ2階まで上がってこられたのか不思議でしたが、素晴らしい笑顔だった。普通の人が見たら幽鬼のようで立ちすくむと思いますけど（笑い）。

2週間後、父は死にました。

「死」という字はあまりよいイメージがしませんが、命を終えた瞬間に志がこの世に残るなんて何だか楽しいじゃないですか。そう考えると、死もまた何かの出発点なのかもしれません。「今が出発点」という言葉が非常に好きなんですよ。

'99年8月、僕は翌年の還暦を目前に〝0歳からのスタート〟という考え方を思いついた。年齢だけ意識していると、まわりの60歳に合わせて、〝これくらいでいいか〟とどこか諦めたような考えになる。

でも新0歳なら、まだ2、3年後にも大きな目標を掲げてもいいと思える。おかげで翌年の誕生日をすごくさわやかな気持ちで迎えました。

僕は今、新13歳です。終活はまだしていません。やりたいことがたくさん残っていますから。

どんなふうに生きて、どう死にたいか。あなたなら、この問いに何と答えますか？

Profile 1940年、静岡生まれ。'80年に『黄色い牙』で直木賞受賞。'96年出版社「KIBA BOOK」を設立。'99年初の絵本を発表し、「よい子に読み聞かせ隊」を結成。全国各地の子どもへ読み聞かせを行う。近著に「なんで!?納得できない…14歳のきみたちへ」